浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

第345号
平成24年7月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

とにもかくにも
できうるかぎり

急いで
早くにと
見えない
ゴールを目指し

奮闘努力
粉骨砕身
頑張りどおしの
あなた

ときには
のんびり
道草してみませんか

遠回りと
思ったその道には
違った風景があり
思いもよらぬ
きれいな花が
咲いていたりします

暢（ちょう）

以前、車を運転していたときのことです。「暢気」という看板の架かった居酒屋さんを見つけたことがあります。私は下戸なので、そこに立ち寄ったわけでもなく、今もやっているかどうかも知りません。ただ、「のんき」というその屋号がいかにも飲み屋さんらしく、会ったこともない大将の顔を想像してみたら、楽しくなってきたことを覚えています。

「のんき」といいますと、気分や性格がのんびりしていて、楽天的な人を形容していう場合が多いですが、一方では、気楽・安易・不注意・無神経といったことを揶揄するといった側面がないわけではありません。頑張る・努力・精進・奮闘・粉骨砕身といった精神とは無縁の世界にいるということで、批判の対象になることもまれなことではありません。仏教においても、しかりであります。

仏典に「黒白二鼠の喩え」という、こんなお話があります。

一人の旅人が広野を歩いていきますと、突然恐ろしい狂象が現れて迫ってきました。旅人は驚いて目散に逃げました。幸い古井戸があり、その中に筋のふじ蔓が垂れ下がっています。

天の助けと、彼はふじ蔓をつたって井戸の中へ隠れました。象は猛り狂った声を発し、井戸の中をのぞき込むものの、中までは入ってこれません。

一安心して下の方を見ますと、恐ろしいことに、その井戸の底には、大蛇が大きな口をあけて、旅人の落ちて来るのを、今か今かと待ち受けています。

上には狂象、下には大蛇、まさに絶体絶命、命の綱はふじ蔓一本です。やむなく足を井戸の側面に突っ張ろうとしたところ、四匹の大きな毒蛇が今にも噛み付こうと鎌首をもたげてきます。

さらに、耳を澄ますと、そのふじ蔓の根元のところで、なにやらガリガリという音がしています。よく見ると、横穴から匹の白鼠が顔を出して、ふじ蔓をかじっているではありませんか。白鼠が穴に引っ込むと、今度は、黒鼠が顔を出してかじっています。

「もう駄目だ。助からない」と天を仰ぐと、ポタリポタリと甘い蜜が、五滴口の中に入ってきました。ふじ蔓の根元に蜜蜂の巣があって、そこから甘い蜂蜜が垂れてきたのです。旅人は、その蜜の甘さにそれまでの恐怖はどこへやら、また蜜が落ちてこないものかと、口を開けて待っているのであった――というものです。

この比喩は、次のように解釈されています。

旅人とは、人生を旅をしている私

たちのこと。狂象とは時間の流れのこと。私たちは、毎日毎日、時間に追われて暮らしています。逃げることはできません。

井戸の底の大蛇は死の影、今すぐにでもと待ち構えています。四匹の毒蛇とは、人間の体を構成している四大、地水火風、どこに毒が回っても命はありません。一本のふじ蔓は命の綱、すなわち、人間の寿命です。

その寿命の根をかじっている白と黒の鼠は、昼夜のこと。昼夜は繰り返され、私どもの命は一日一日と縮まっていきます。

五滴の蜂蜜とは、五欲のこと。食欲・色欲・睡眠欲・名誉欲・財欲、どれもが、人間にとって甘く魅惑的です。

以上、この比喩はとても示唆に富んでいます。かのロシアの文豪トルストイも、その著『わが懺悔』で「古い東方の寓話(ぐうわ)」として紹介しています。川柳に、**「いつまでも生きている気の顔ばかり」**というのがあります。芭蕉の句にも、**「やがて死ぬけしきは見えず蝉の声」**というのがあります。ここには、「人間も蝉も、明日の命か分からぬのに、まあのんきなもんだ」といった気持ちが込められているのだと思います。ならば翻(ひるがえ)って、彼の旅人、私たち、蝉はどうすればよいのでしょうか。

われわれは、努力精進すればなんとかなると思っている節があります。うまくいかないのは、努力が足りないというわけです。しかし、世の中そう単純ではないようです。心理学者の河合隼雄(はやお)が、ジッドゥ・クリシュナムルティの**「物事は努力によって解決しない」**という言葉を紹介しておられます。確かに、彼の旅人は、どんなに努力しようが、危機的状況が改善されるとは思われません。

もちろん、努力しなくてもよいということではありません。河合氏は、**「道草」「遊び」**の必要性を説いておられます。つまり、しゃかりきになるだけでは駄目なんで、視点を変え、心に余裕を持ちなさいということだと思います。

そうしてみると、彼の旅人が、「蜜が落ちてくるのをボーッと待っている」、それもありということです。落ち込むでなく、「いつまでも生きている気の顔ばかり」「やがて死ぬけしきは見えず蝉の声」、それがいいのです。

仏教では、「色即是空」といって「空即是色」、「生滅」するといって「不生不滅」であるといいます。矛盾するようですが、こうしないと本当のことが分からないのです。「精進」も大切ですが、「暢気(のんき)」も捨てたもんではありません。頑張りすぎている人に、「暢(ちょう)(のびのび)」の字を贈ります。

◎**堂々**（どうどう）

形や行いが公然とし、立派なさまを「**堂々としている**」と表現する。あるいは「**堂々の陣**」などと、構えの堅固さを表したりする。

さらには、同じ議論をいつまでも繰り返し、少しも進展しない、実りの少ないさまを「**堂々めぐり**」といったりもする。この二つの「**堂々**」は、実は同じ語源なのである。

この堂は伽藍堂（がらんどう）と考えていい。最初はみすぼらしかったこの堂も、やがて仏教の隆盛とともに巨大なものとなり、下から見上げるばかりの大建築となった。信者たちにとっては、その姿は仏教の威厳そのものであったろう。つまりは、堂々とした建物に映ったのだ。

さて、この堂をめぐる礼拝方法がある。現在でもインドやスリランカでは、民衆が仏像や堂のまわりをめぐって祈る姿が見られるが（日本では、僧侶たちだけが行っている）、これが堂々めぐりなのだ。

そうした繰り返し繰り返し祈る姿が、少しも進展しない議論をたとえる語になったのである。しかしこの日本語、現在でも真剣に堂々めぐりしている東南アジアの仏教徒には、あまり聞かせたくないことばだ。

（『仏教のことば』ひろさちや監修）

今月の一言

今を
大切に生きるは
一生を大切に
生きること

雑記

▼お詫び&ご案内

佐久島にて

本年度の行事予定で、秋彼岸施餓鬼会の日程を、9月22日（土）と、年頭ご案内させていただきましたが、左記のとおり、例年と同じの23日とさせていただくことにしました。ここに、変更案内させていただくとともに、深くお詫び申し上げます。なお、お盆の行事日程に変更はございません。

《**日程変更**》

・秋彼岸施餓鬼会

9月23日（日）

午後1時30分～2時45分

▼三島巡り

佐久島・篠島・日間賀島の三島を巡る日帰りツアーに参加してきました。一日で三島を見て回るということは、やはり少々無理なところがあり、へとへとになってしまいました。しかし、三島には、それぞれ歴史文化の特色があり、今度は、もう少しゆっくり訪れたいと思っています。

◆佐久島や蝶（ちょう）も長閑（のどか）に綴（つづ）れ道　沐魚